

林政ジャーナル

No.21

1999年4月10日

発行所

日本林政ジャーナリストの会

〒162 新宿区市ヶ谷本村町3-26

0845 ホワイトレザダンス

TEL 03-3269-3911

FAX 03-3268-5261

第21回定期総会報告

本会の第21回定期総会を、2月17日、東京都港区の麻布グリーン会館で開催、1998年活動報告、同収支決算及び監査報告、1999年活動報告、同収支予算、役員改選を審議し、原案どおり可決・承認されました。

本年は、「日本の林業をどうするか」を年間テーマに研究会活動等を行うほか、秋頃に共同取材を実施、また、会報「林政ジャーナル」の充実などに取り組むこととしました。また、役員改選では、副会長の成田利典氏が辻五郎氏に、事務局長の辻潔氏が赤堀楠雄氏に、会計幹事の赤堀楠雄氏が児玉洋子氏に、それぞれ交代しました。（総会に欠席された方には総会資料を同封しておりますので、ご参照下さい。）

総会終了後、別掲のとおり、作家の足立倫行氏から記念講演をいただき、その後、懇親会を行いました。

課題と困難と

副会長 辻 五郎

日本林政ジャーナリストの会が発足した20年前には予想もしなかったことだが、これからの森林管理・経営の基本が、グローバルな視点と地域に根ざした・生活者の視点とによって絶えず更新される、持続的な管理・経営にあるとすることについて、いま異議を唱える人は殆どいなくなった。時代の流れは、大きく変化したと言えよう。

だが、その基本を地につかせるのは、容易ではない。新たな自然資源管理の方法としてアメリカやカナダで展開されつつあるエコシステムマネジメントの考え方が教えてくれているように、それは、①森林を他の分野から独立して管理可能だとしてきた従来の考え方を捨てるとともに、より長い時間スケールとより広い空間スケールで森林を捉えること、言い換えれば縦割り行政やいままでの所有境界を超えた長期的な視野のもとで森林の管理・経営の在り方を探ることを要請している

からである。同時に、②人間を生態系の一員として捉え、望ましい生態系の維持とその攪乱要因でもある私たちの社会・経済・文化活動とを統一的に考えることを迫っており、したがって、③エネルギー管理や地域資源の循環、風景やアメニティといった生活者の感性が重視される中で、関係する多様な人々が管理・経営の決定過程を共有し協力する仕組みを作り出すことを求めているからである。と言うことを足下の事情と絡ませて言えば、④持続可能な森林管理・経営を根付かせることは、目下進行中の地方自治や情報公開、公的事業評価制度の精密化や住民参加等々と併せて、これまで慣れ親しんできたシステムを土台から1つ1つ変えていこうとする意志と力量とを抜きにしては、とうていかなわぬことだからである。

先の総会後の懇談会席上で私が、「日本林業の困難と課題の大きさを言うとき、ジャーナリストの一員としての困難と課題の大きさに、改めて思いを致さざるを得ない」と口走ったのも、以上のような思いが脳裏を横切ったことによる。

例えば、この稿を書いている3月中旬、届いた雑誌を開くと、『林業経済』第604号の巻頭では半田良一氏が「環境にやさしい持続的な地域林業体制を樹立するには、ハード面では是非とも、地域単位の計画伐採とセットの形で国産材の価格支持制度の導入を要望したい。」と書かれている。一方、『山林』第1378号の巻頭では岡和夫氏が山村振興策として「市町村森林整備計画に基づいて行われる林業生産活動に対して助成の拡充を図ることとする。(中略)つまり、立木代収入についての価格補償である。」と提案をされている。期せずして異なる場所から同時に発された2つの価格支持(補償)政策の提言には、世界トップの森林率を保有しながら縮小過程をたどっている我が国の林業生産の現状を打開したいとする熱い想いと、その前提として、「市場経済の肥大を無批判に是認した都市・山村双方」への批判(半田)、および「公共事業型、企業誘致型、観光開発型」とは異なる「内発的發展」への期待が示されていることに共感する。けれども、国際的な大競争時代にいかに勝ち抜くかの術策が喧伝され、私自身もその時代の子として安楽へと流れる目下の風潮の中で、岡氏がその提案の直後で注意を喚起している、価格補償に伴って予想される「モラルハザードの防止策」という一点だけをとってみても(そこでは、今日立てられるべき倫理と、山村で働き・生活する者の矜持、そして社会的公正をめぐる合意をどう立て得るかという根本問題が提起されるであろうし)、なかなか超えられぬ各種・複雑なハードルが、その前途に横たわっていると思われる。

で……、ここまで書き進めてきて、気付くと、予定されている紙幅を既に過ぎていた。以上のような思いを前提に置き、グローバルな視点と地域に根ざした視点とを手放すことのないように心がけつつ、「日本林業をどうするか」を年間テーマとした研究会の端に加わって、そこでの多彩な声に耳を傾けたい。こう記すことでこの小文は閉じさせて頂こう。ではまた、お会いする時を楽しみに……。

就任にあたって

事務局長 赤堀 楠雄

先日の総会で事務局長に選任されました。会員の皆様にご挨拶を申し上げますとともに、就任の抱負を述べさせていただきます。

今後の会の運営にあたっては、次の3点に力を入れていきます。

第1に研究活動の活性化です。今年の年間研究テーマは「日本の林業をどうするか」に決まりました。これから1年間、林業をめぐるさまざまな問題を研究会などで取り上げていくわけですが、研究の基本的な姿勢としては常に「現場重視」を心がけ、中身を濃くしていくつもりです。そのため、去年は参加者が定員に満たずに実施できなかった現地共同取材を今年はぜひ実現し、できればそのほかにも林業あるいは国産材関連業界の最前線を訪れて現場の生の声を聞く機会を作りたいと考えております。

次に会報「林政ジャーナル」の充実です。会の活動はどうしても東京が中心になってしましますが、会員の中には地方にお住まいの方も数多くおられます。普段なかなか研究会などに参加できない方のためにも、会の活動をその都度ご報告することはもちろん、新たな企画を盛り込むことなどによって、これまで以上に会報を充実させたいと考えております。

もう1つの課題は組織の強化です。現在、個人会員数は100人をわずかに超える規模となっておりますが、残念ながら実際の会員数はそれよりも少ないと言わざるを得ない状況です。当然、会の活動を充実させるためには会員の増強を図らねばなりません。

しかし、それにも増してやらなければならないのは、この「日本林政ジャーナリストの会」という組織の魅力を高め、少しでも多くの会員が意欲的に会の活動に参加していただけるようにすることだと考えております。そのためには先に挙げた研究活動の活性化や会報の充実には全力を挙げて取り組むつもりです。

今後は会長、副会長をよく補佐し、会員の皆様のご希望を的確に把握して会の運営に反映できるよう努力してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本林政ジャーナリストの会第21回定期総会記念講演

日本の林業地を歩いて感じたこと

足立 倫行

【プロフィール】鳥取県出身。ノンフィクション作家。1981年にデビュー作「人、旅に暮らす」を発売。以後、同時代の人の仕事や生活を通じて、「この時代に生きる意味」を探索している。主な

著書に、「日本海のイカ」「北里大学病院24時」「アジア海道紀行」「アダルトな人びと」「妖怪と歩く」などがある。また、最近の著作「森林ニッポン」では、各地の林業地を訪ね、実情をつぶさに紹介した。



ルポライターの足立といいます。昨年5月に、この「森林ニッポン」という本を新潮社から出しました。ご紹介にありましたように、北海道から沖縄までの林業現場を訪ねて、日本の森林で現在起こっているさまざまな動きをまとめたものです。

私は、この分野では全くの素人に近く、林業に関わるルポを本としてまとめたのは初めてです。これまでに、奥只見の本など、動物を中心にした本を2冊出したことがありますし、40歳を過ぎてから山に通うようになり、日本の森林や林業の現状に興味を抱いていましたので、いつかこういう本を書いてみたいとは思っていました。そういう意味では、私は何でもとり上げるルポライターではありますが、森林・林業の一ファンと考えていただいて結構だと思います。専門家の皆様に前に、このようにしてお話をするのは、まさに釈迦に説法で、本当に心苦しいのですが、一林業ファンが各地を回り、どういうことを感じたのかをお聴きいただければ幸いです。

●「タマンネガラ国立公園」を訪ねて

「森林ニッポン」の取材を通じて出会った人、感じたことなどをお話する前に、昨年の10月末から11月にかけて、マレーシアに小旅行にでかけたときのことをお話します。

マレーシアでは、2カ所ほど訪ねました。1カ所は、マレー半島の東側の内陸部にある「タマンネガラ国立公園」です。首都のクア



ラルンプールから北に車で3時間ほど走ったところにあります。もう1カ所は、同じくマレー半島の西海岸側で、タイとの国境に近いところに点在している島の1つ、ランカウイ島です。本日は、時間の関係で、タマンネガラ国立公園の熱帯雨林に関する話をさせていただきます。

タマンネガラ国立公園は、1983年に設定されたマレーシアで最初の国立公園です。マレーシアが大英帝国の植民地だったころは、鳥獣保護区に指定されていた地域で、これが発展して戦前から国立公園に指定されていました。面積は、約4,340平方キロメートルですから、シンガポールの7倍くらいに相当します。マレーシアで一番高い山、タハン山の麓に、土色をした泥の川が四方八方に流れています。その周辺は、典型的な東南アジアの低地性の熱帯雨林を構成しており、ラワン材で知られるフタバキ科の60～70mの巨木が林立しています。それが、大変よい状態で保全されているところです。

●先進的なエコ・ツーリズムのメッカ

ジャングルの起点から国立公園の入り口までは、普通の観光客は入れないように規制されていますので、入り口までは、川をモーターボートに乗って進むことになります。3時間ほど両側にジャングルを見ながら川を遡っていくと、入り口に着きます。そこは、タマンネガラ・リゾートと呼ばれています。

私が、なぜその場所を訪れたかという、今、注目されているエコ・ツーリズムのメッカだからです。エコ・ツーリズムとは、文字どおり生態系を重視した旅行です。これまでのような環境破壊につながるおそれのある観光旅行とは異なり、地域の自然環境を十分尊重し、最大限に活かした観光開発を行うことを目的に、生態系重視のエコ・ツーリズムが注目を集めています。

生態系とは、生物・無生物の織りなす、あるまとまった物質循環の全体の系のことです。こうしたエコ・ツーリズムは、欧米で多く行われており、世界的にはコスタリカが有名ですが、アジアの中では、マレーシアは比較的進んだ地域と言えます。日本では、西表島など琉球諸島の南部で、エコ・ツーリズムがようやく始まったばかりです。マレーシアのエコ・ツーリズムは、すでに10年近くの歴史がありますから、日本よりは進んでいると言えると思います。

従来の観光地というのは、大概の場合、観光客のニーズに合わせた建物を建設してきました。ニーズという言葉はいいのですが、それは欧米文明の価値観にのっとって、あまり深く考えることもなく施設づくりを進めてきたということです。ゴルフ場ばかり、豪華ホテルばかり、プール、レストラン、乗馬施設、スキー場などはいずれも、欧米先進文明において観光地と呼ばれているものの模倣にすぎません。こうしたことを全世界で行ってきたことで、世界的な環境の悪化と経済的な不況——世界同時不況を招きました。どうも従来と同じやり方では、21世紀という時代は切り開けないのではないか。今までの欧米文

明が、大量生産、大量消費、大量廃棄に繋がっており、観光業もその1つにあげられ、抜本的に改革しようという気運が、世界的に盛り上がっています。

そこで、マレーシアでも、主に中華系の人たちが中心となって、土地、文化、風土、自然、生態系というものをありのままで示し、観光客は滞在して伝統的な郷土料理などを味わってもらうことなどでお金を地元へと落としてもらう。そういう観光業のスタイルに乗り出す動きが出ており、そのシンボリックな事例が、タマンネガラ国立公園の熱帯雨林と言えます。

●多くの生物種を保全するシンプルな生活

私が訪れたのは、ちょうど雨期にさしかかる頃で、天気はあまりよくありませんでした。タマンネガラ・リゾートの近くに、人口1,000人程度の小さな村があります。そこは、泥の川の袂に位置しています。泥の川といっても土などの有機物ですから、人体に危険な物質が入っているわけではなく、ナマズや鯉の一種が、非常にたくさん獲れます。この村の人は、こうした豊富な淡水魚を獲ったり、ヤマモ、キャッサバを栽培して、非常に小規模な農業と漁業を長い間営んできたわけです。

そして、10年ほど前にWWF（世界自然保護基金）の支援を受けて、マレーシア観光局がエコ・ツーリズムの拠点に選定しました。先ほど申しあげましたように、英国の鳥獣保護区の伝統を引いていますから、大変よい状態で保存されています。おおよそ1万種の植物、8万種の昆虫、350種の野鳥、300種の魚類、140種のほ乳類、ヘビだけでも100種はい

ると言われています。マレーシア半島部ではすっかり少なくなったスマトラサイというサイも、10頭生き残っているのではないかと言われています。また、アジアの中では、スマトラとカリマンタンにわずかに生存しているアジアゾウが、この地域に約200頭残っているのではないかと推測されています。トラも数頭～10頭いると言われています。観光客は、運が良ければ、こうした動植物をみることができます。

村民達は地元の木を使って、マレーシア風のスタイルのロッジを建てました。全部で200室くらいあります。何人もが寝泊まりするバンガロー風のものから、ゆったりとくつろげる部屋まで、さまざまです。もちろん電気は通っていますが、テレビなどは置いていません。天井に大きな扇風機の羽根がまわっているだけです。非常にシンプルで、熱帯の美しい草花に囲まれています。

ここでも、ゴミの処理が大きな問題になっています。排泄物や雑排水は、深く掘った穴にしみ込ませる方法で処理しています。ロッジの担当者によると、排水は一滴たりとも外に出さない、特に川には絶対に流さない方針だということです。こうした処理は、実は日本の技術の方が優れていて、日本ですと、微生物を使った合併浄化槽など、高度なレベルの機械装置を投入できる分野です。

また、生ゴミについては堆肥にしています。問題は飲料水の容器のプラスチックボトルですが、こうした容器にはすべてシールが貼付されていて、所定のところに持っていくと1リンギット＝約30円還付されるシステムになっています。空き缶やその他の容器類も

同様です。返却すると換金できるシステムになっており、容器類のゴミはすべて回収して、対岸の村の奥にある共同埋立場に捨てるのだそうです。埋立てがいいのかというと、あまりよくないのですが、現地の人が言うには、少なくとも日本のように安易に焼却しない、ダイオキシンが発生するので埋設することになっているということです。日本には、もっとよい処理技術があるでしょうが、現地の人は、ダイオキシンを出さないと胸をはって説明していました。

●トレッキングとキャノピーウォークが人気

ジャングルの中は、60人程度のスタッフが常時パトロールしていて、ゴミを投棄したり、動植物を採取したりすると、犯罪として即座に摘発し、罰金を徴収します。公園内でのこうした行為に対しては、約300リンギット＝1万円弱という現地では高額な罰金が課されます。このようにゴミ問題に対しては、「極力注意を払っている」とマネージャーは力説していました。

公園内では、魚釣りやトレッキング、洞窟探検など、さまざまな楽しみ方ができますが、もっとも一般的なのは、ジャングルトレッキングです。必ず地元のガイドが同伴します。所定の試験をクリアした優秀な人達がガイドとして、38名任命されています。ガイドは、動植物の説明をしてくれます。ガイド料金を支払う、オプションツアーとなっています。

ジャングルの中の熱帯林の特徴は、イチジクの仲間が非常に多いことです。また、先ほども話に出ましたフタバガキ科の高木、それからくねくねと広がった盤根をもつ樹木、ツ

ル性の植物など、1 ha当たり約200種を超す非常に多くの植物が、このマレーシアの低湿性熱帯雨林地帯には植生しています。

林間部は、樹木が詰まっていますが、熱帯雨林の中は、比較的すいていて歩きやすくなっています。ヘビもありますが、もっと怖いのは虫だと言われています。その中を歩きながら、説明をしてもらうわけですが、説明にも配慮が行き届いています。例えば、何十種類もあるツル性の植物の中のいくつかの種類は、ツルを切ると水が出ます。ジャングルで道に迷ったときなどは、この水を飲んで生き延びることができる、非常に貴重な水です。こうした知識があるかないかでは、ジャングルの中では大きな違いが出てきます。ただ、従来のネイチャー・ツーリズムでは、説明するのに、観光客を案内する都度、毎回ツルを切らせて見せていたわけですが、エコ・ツーリズムの場合は、一切、切りません。1日に30～40組案内して、毎回ツルを切っているのは、大量のツルを切ることになり、あっという間に貴重な熱帯雨林がダメになってしまうからです。ツルはそう簡単には生えませんが、低地性の熱帯雨林の場合には、ツルが1つの生態系のシンボルになっているわけです。このように、熱帯雨林のことについて、説明するのみで、自然に手を加えることは一切しないのが、エコ・ツーリズムの特徴です。

もう1つ、当地のウリになっているのが、キャノピーウォークです。キャノピーというのは、林冠、樹冠部のことで、林冠回廊を歩くわけです。最近、熱帯雨林の林冠部は大変注目されていて、先日、カリマンタンで亡くなりました井上民治先生をはじめとする

京都大学の生態系研究グループが、サラワクなどで林冠回廊の設置作業を進めています。マレーシアのエコ・ツーリズムのコースにも、いくつかの林冠回廊が設置されています。設置作業当初は、欧米の研究グループが先頭に立ちましたが、現在できあがった半分以上の回廊は、地元の人達がつくったと誇らしげに説明していました。

キャノピーウォークでは、地上から30～40 mのところを、樹上の間を縫うようにして歩けます。そうすると、リスやモモンガ、ムササビなどの樹上性の動物、非常に珍しいマレーヒヨケザル、そして無数の昆虫が見られます。先ほど昆虫の数を8万種と申し上げましたが、実はそんな程度ではありません。現在、全世界の生物種は約150万種ぐらいあると言われていますが、熱帯雨林の林冠部の細かい調査ができれば、一挙に2,000万～3,000万種に増えるであろうと言われています。

先日、私は京都大学の先生の講義を聴きまして、どれが新種かを訊ねたところ、99%が新種であり、まだ名前すらついていない種があるということでした。このように、熱帯雨林という非常に貴重な地域を、私達は実際に見て回ることができるわけです。

●日本からの来訪者は非常に少ない

タマンネガラ国立公園は、マレーシアの、あるいは東南アジアのエコ・ツーリズムのメッカと言われているわけですが、ここに年間約5万人の観光客が訪れます。そのうち、日本人は1,000人弱で、非常に少ない。最も多いのはヨーロッパからの観光客です。イギリス、フランス、ドイツのほか、スカンジナビア半

島の国々の人も非常に多い。レストランの客もほとんどがそうです。そして、次に多いのがアメリカ人やオーストラリア人などの白人です。

とにかく日本人はほとんど見かけません。日本人が少ない理由の1つには、ツアーの説明が英語で行われるということがありますが、それにしても、やはり少なすぎるのではないかと思います。この地域の開発にあたった方に話を聞いてみますと、日本人観光客は最後に残ったターゲットだそうです。他の国は、マーケティングを行って、順調に観光客を集めているが、日本だけは、なかなかうまくいかない。マレーシア旅行という、どうしても美しいビーチでくつろぎながら日焼けをして帰国する、というパターンが圧倒的に多いようです。

マレーシアは、世界の熱帯雨林の宝庫です。サラワクでは伐採が進み、熱帯雨林は国立公園などにしか残っていないわけですから、もっと日本人にも足を運んでももらいたいと思います。自然にひたりながら、生物の多様性について学ぶことは、大変重要なことです。日本人にはそういう準備があまりできていないようで、非常に残念なことだと、現地の人も言っています。私も全くそのとおりだと思います。他の観光地では、日本人がのし歩いているわけですが、少しお勉強の要素が入ると、なかなか足が向かないようです。

●林業外の人達がかかわり始めている

さて、「森林ニッポン」の取材先の中から、いくつかお話ししたいと思います。

今年1月26日に「全国漁民の森フォーラム」

が、東京都港区の虎ノ門パストラルで開催され、私も参加しました。このフォーラムは、北海道の漁民が木を植えている取り組みがきっかけとなって始まったものです。私が取材した時点では、北海道各地にすでに40万本もの木を植えていました。北海道庁も行政支援の一環として、記念講演会を開催したり、記念植樹や苗木の無料配布を行うなど、大変積極的に取り組んでいます。

こうした運動は、北海道を中心に、全国20数府県に広がっています。森林や林業に全く関係のなかった漁業関係者が、自分達の本業への危機感から、山や樹木に関心を寄せて、行動に移した1つの好事例だと思います。

次に、紀州備長炭のふるさと、和歌山県南部川村に取材したときのことをお話します。そこでも、炭焼きの後継者のほとんどが、村外からやって来て住み着いた、都市部からの新規参入者です。都会に住んでいた人が、なぜ炭を焼いて生活しているのか——。それは、自然の中で生活を営むというライフスタイルに対するあこがれです。山村へ足を向けて、遂には家族を連れて引越したり、若い人の場合は、地元の女性と結婚して炭焼業を引き継ぐ人が増えつつあります。私が取材した人の中にも、実際にそういう若者がいます。

●東京の森林ボランティアに注目

そうした取材の中で、最も興味深かった「東京の木で家を作る会」の人達と、その周辺の人達——いわゆる森林ボランティアと呼ばれる人達のことをお話したいと思います。この会の人たちは、さまざまな動機で、あるいは活動形態で山に入っています。「東京の

「木で家を作る会」は、あの有名な「森づくりフォーラム」の一員です。「森づくりフォーラム」は、9つの市民グループで別々に作業していた森林ボランティアや、東京都多摩地区の林業家、都庁の農政関係職員、東京農大の先生などが個人的な立場で集まり、1995年6月にネットワークを結成したものです。「東京の木で家を作る会」は、「森づくりフォーラム」の中から発生してきたグループです。

東京には、全面積の36%にあたる787平方キロメートルの森林が、多摩地区と伊豆・小笠原諸島にあります。そこでは、全国の林業地と同じように、人手不足と高齢化によって人工林そのものが危機に瀕しています。

そこで、みんなの力で豊かな森林を守り、育てていく知恵と力を出し合っていこうと、「森づくりフォーラム」ができ、ここから生まれた「東京の木で家を作る会」は、一級建築士の長谷川敬さんが代表をつとめています。長谷川さんは、もともとは大阪万博などで活躍した丹下健三さんのもとで働いていた、前衛的な建築家でした。外国にも頻繁に出かけ、アリゾナで最先端の建築技術を勉強された方ですが、日本に帰国してからは一転して個人住宅に興味を抱き、現在は、民家を中心に仕事をしています。一般的に知られている長谷川さんの代表作は、東京都小金井市にある桜町病院聖ヨハネ・ホスピス病棟の建築設計です。この建物はすべて国産材を使用しておりまして、ベッドも木製ですし、廊下、天井にも国産材をふんだんに使用しています。この病院の院長である山崎先生から、ホテルのように快適で、自宅のように心安らぐ、そういう建物をつくってほしいという要望がありま

した。そこで、長谷川さんは、病院の中庭に、木がうっそうと繁っていて、水があり、花が咲き、小鳥が鳴いている——そういう空間をつくり、すべての病室から眺められるようにしました。それは、もはや病棟という感じはなく、非常に自由で、しかも木の香りが漂う、懐かしいような、ほっとするような空間です。これが、長谷川さんの代表作です。

●地域材の循環利用を目指す

「東京の木で家を作る会」

長谷川さんはこうした思想のもとに、「東京の木で家を作る会」を運営しています。これは、1996年4月に、「森づくりフォーラム」ができてから1年後くらいに結成されました。林業家が10名、製材所が3社、工務店が3社、設計事務所が7社——こうしたメンバーが大同団結し、単に家をつくるのではなくて、「東京の木」を使って、木造住宅をつくる。このことによって、地域の木材を中心とした循環サイクルを復活させたいというのが目的です。仕事が減って困っている地元の製材所や工務店と、都心部で家を建てたいと考えている人達とが、家づくりを通してかわり合えるわけです。

家というのは何十年も住むものであり、昔の家は100年、200年もつのが当然でした。最近では、新建材等から発生するホルムアルデヒドなど、有害化学物質によるシックハウス症候群などが問題となっています。その対策として、健康によい地元の材を使って家を建てようとの動きが見られます。木材ですから、少々狂ったり、割れたりしますが、騙し騙し使うことはできるわけです。

地域材を活用しながら、循環型の社会を構築していく。「東京の木」で家をつくるという、やわらかい運動を楽しみながら、森に足を運び、ユーザーにも参加してもらう。自分の家に使われる木を見てもらい、地元の製材所にいって、木の挽き方や使い方を実際に目で確かめてもらう。そうすると、単にお金を払って、いつできるのかという話ではなくて、ユーザーが木に愛着や関心を抱くようになります。そういう人間関係を再構築することも、東京の木で家を作る会の目的の1つです。

●「林土戸」の取材現場で出会ったこと

東京の森林ボランティアには、「林土戸」というプロの林業技術を学ぶグループや、皆伐跡地を借りて独自のコンセプトで森林づくりに取り組んでいる「創夢舎」など、いくつかのグループがあります。こうしたグループの中には、「森づくりフォーラム」に属していて、なおかつ「東京の木で家を作る会」の仲間として活動しているグループもあり、毎年のように参加者が増えています。

私は、「林土戸」の活動を、何度か取材しました。また、取材が終わった後も、雪起こしの活動などに、一人の森林ボランティアとして参加しました。

「林土戸」の代表をしている高橋さんという若い女性にも会いました。毎週日曜日にあきる野市の山で、7名くらいで活動しています。季節ごとに下草刈りや、枝打ち、間伐などを行っています。私が最初に行ったときには、11人中6人が女性でした。服装の色だけでも、実にきらびやかで、大変驚きました。それ以上に驚いたのは、みなさんの「本気さ」

です。2名を除いては、みな毎回参加している人達で、自分専用の鉋を持っていました。山に入ると、その鉋の刃を嬉々として磨き始めます。そして、ファッショナブルな服装で作業にかかります。そのときは、77歳の林業家の大番頭さんが、鉋の研ぎ方、ふるい方や梯子の運び方、のぼり方など、いろいろなことを指導していました。

この大番頭さんは、私が行ったときには、ニコニコとした好々爺でしたが、高橋さんによると、最初の3カ月くらいは、口もきいてくれなかったそうです。遊び半分の素人は相手にできないといった、頑ななプライドがあるようでした。高橋さんたちは、誠意をみせるしかないと考え、毎週かかさず、冬も通して、雪の日も休まず作業に取り組みました。仕事が1日で終わらなかったときには、会社を休んでまで通ったそうです。こうして3カ月くらいすぎると、ようやく大番頭さんは「おまえたちは変わっとるの」と一言おっしゃったそうです。高橋さんたちが、決して遊び半分ではないということがわかってもらえ、それからは一転して、大変やさしく教えてくれるようになったそうです。私が「林土戸」の活動に初めて参加しても、ニコニコとしながら教えていただけるのは、高橋さんたちの苦勞があったからなのです。

●なぜ山の作業に通いつづけるのか

高橋さんに、なぜ山に来るのかと訊ねると、子供の頃から木が好きで、いつも木に触れていたいという答えが返ってきました。多摩の山は急斜面で、危ないところも多く、私は最初とまどいましたが、高橋さんにとっては、

木の感触や香りに非常に愛着を感じる場所であつたわけです。

「林土戸」にはもう一人、「東京の木で家を造る会」のメンバーであり、長谷川さんの事務所で働いている徳田さんという女性があります。日本女子大の学生時代から建築を志し、長谷川さんの「家の町医者になりたい」という一言に感動してアトリエの門をたたいた人です。この人も最初は休みの日くらい家で寝ていたいと思っていたのですが、高橋さんと出会い、非常に楽しそうにやっているので、半信半疑ながら「林土戸」に行ってみました。すると、確かに作業を終えると非常にさわやかな感じがする。そして、下草刈りをやったら、枝打ちもやってみたい。さらに間伐もということで、彼女も年間を通じて山の作業に通うようになったわけです。

彼女は、山での作業を通じて、いくつかのことを学んだと言っています。それまで、国産材は窮地にあって盛り返すのは大変だと頭ではわかっていたつもりだったのですが、作業をするまでは本当にわかっていなかったことに気づいた。死ぬような思いをして伐り出した間伐材が、1本2,000円くらいにしかならないと、泣きたくなくなってしまうというのです。そうした辛さを、身をもって理解したわけです。また、最初は、自分みたいな若い女性が参加すると、山で働いている人達を元気づけることになると思っていたのですが、励まされるのは自分の方で、逆に元気づけられた。70歳を過ぎていても、1本梯子をスルスルとのはって、軽業師のように作業をする人がいて、少しも疲れていない。そういう人がたくさんいるということがわかった。彼女は、こ

こを卒業したら、夫の転勤に伴っていろいろなところに行って、各地で住宅の設計をやろうと考えているのですが、どこに行こうと地域の木を活かして、日本の構造美をあらわせるような住宅をつくりたいと言っています。

●林道の必要性を身を持って理解

私が取材した森林ボランティアの中には、33歳の原田さんという方もいました。この人は、「創夢舎」のメンバーです。この人は、中央大学を卒業して、社会人になり4年ほど地図会社で働いたのですが、どうも自分は建築が好きだということで、大学の建築学科に入り直し、卒業して長谷川さんのところにいます。

中央大学の学生時代に、日本中の山という山を歩いた。そのときは、林道が大嫌いであり、植林した人工林は、なるべく見ないようにして歩いたということです。林道は、自然の破壊者以外の何者でもない強く思っていた。ところが、長谷川さんのアトリエに入って、枝打ちの作業などを体験すると、考え方が変わってきた。

特に、この人が一番感激したのは、三重県・尾鷲の林業地を訪ねて、何とかうまく経営・管理されているのを知ったことでした。間伐した後もきちんと手入れがされている。このような手の行き届いた作業をするには、林道がどうしても必要だということがわかり、だんだん意見が変わってきました。皆伐即悪だと思っていたのですが、皆伐がいけないとしたらどういうやり方で材を出すのか、出し方がない、どうしても皆伐をしなければならぬ場所もあるわけです。そういうことが、

自分で作業をするとわかってくる。

原田さんは、そういう知識を得て、国産材を使ってものをつくりたいと考えるようになりました。これは、長谷川さんの小さな事務所の中の話ですが、作業を通じて建築家の価値観が変わってきているわけです。

原田さんが所属する「創夢舎」が作業しているのは、皆伐跡地を2haほど借り受けたところです。30人ほどのグループで、1年間かけてヒノキとコナラを半分くらい植えました。あと半分には、トチ、クヌギなどの広葉樹を植えて、自分達の遊べる森をつくることにしています。「創夢舎」の場合は、林業技術の習得というよりは、レジャー林業というものを標榜しています。

●危険だからこそ、山仕事に挑戦する

「創夢舎」のリーダーに羽鳥さんという人がいます。羽鳥さんは、1987年に、東京の林家が雪害で困っていることを知り、何か手伝いたいということで山づくりにかかわりはじめました。1本1本倒れ、雪に埋もれて死んでしまったようなスギを起きあがらせる作業を行い、夏に作業現場を訪れると、自分が起こしたスギが、息を吹き返し、空を向いて再び伸びはじめているのがわかった。このことに感激して、羽鳥さんは林業とのかかわりを深めていくことになります。

羽鳥さんは高校の先生なのですが、山での作業は「危険だからやる」と言います。高校の教師という職業の中で、鉋1本持って、1本梯子にのぼって枝打ちをするような緊張感というのではない。スポーツが好きで、野球やテニスをやるけれども、そういう緊張感はない。

い。山で、危険と背中合わせになりながら作業しているときに、身体性の回復、つまり自分の身体のアイデンティティーを感じるというのです。奥さんは反対しているそうですが、やめられないということで、毎週毎週山に入って、枝打ちをやったり、炭を焼いたりして、彼に言わせると「遊んでいる」わけです。彼は、自然保護を掲げるのは嫌いです。結果的に自然を守ることになるのはいいが、まず遊びが重要であり、遊ぶことこそが、都市の生活者にとって意味があるという考えなのです。そして、遊びに飽き足らなくなった人達は、「林土戸」の方に分派していった、林業技術者にプロの技術を学び、初めての参加者にそういう技術を伝える役割を果たしています。

これはボランティアのいいところであり、悪いところでもあるのですが、1回来ただけであとは全然来ない人もいます。そういう人達にも、その日の作業を教えなければなりません。プロの林業家ならばカチンときて嫌になってしまうようなことでも教えなければならない。つまり、プロの林業家と、初めて参加したボランティアの橋渡しができる人が重要だと高橋さんはおっしゃっていました。そういう人が必要なことから、私はそれを行っているというように、自分で自分の役割を決めて、山に入っている人もいます。

●川下から川上へ人が動き始めた

以上述べたような事例では、これまで森林や林業とは縁が薄かったり、ほとんど無縁だった人々が、積極的に山とかかわり始めています。こういううねりの中で、変化の核はどこにあるかということ、税金や木材価格の問題

などもありますが、やはり私は川下から川上へ人々が動き始めた。新しい流れができ始めた。ここを抑えることが肝要ではないかと思っています。

これまで木材生産のみの価値観だったところへ、自分のライフスタイルを求めてとか、身体性を回復するとか、魚を増やすためにとか、さまざまな理由で人々が山に向かい始めています。これは価値観の転換であり、多様性のあらわれだと思います。政府が言ってい

る、環境財としての森林の内実とは、こういう価値観の転換をいうのではないのでしょうか。

これからの林業を考えた場合、昭和30年代、40年代の好景気がもう一度やってくるとはほとんどの人が考えないでしょうが、それではどんなものがやってくるかというと、素人が限りなく森林に入っていってさまざまな活動をするようになる。その中に林業というものが位置づけられるのではないかと思います。

(文責・土屋 昇)

お知らせ

本会の会費納入先の銀行口座が下記のように変わりました。お間違えのないようお願いいたします。なお、あさひ銀行赤坂支店の口座は3月末で廃止しました。郵便振替口座(00120-0-30216)は引き続きご利用いただけます。

●「日本林政ジャーナリストの会」の新しい銀行口座

第一勧業銀行虎ノ門支店

普通 1959679

●年間テーマ「日本の林業をどうするか」の第1回研究会を以下のとおり開催します。ご出席をお願いいたします。

と き 4月22日(木) 午後6時から8時まで

ところ 林野庁林政部会議室(農林水産省7階、中央エレベーター横)

テーマ 日本林業が直面している問題と解決の方向

講師 岡 和夫・元東京農工大学教授